

次の時代のリスク評価を考える研究会

Study Group on the Future of Risk Assessment
and Management (FoRAM)

今後の進め方案

リスク評価/管理の社会実装に向けて

2012年4月3日

岸本充生

背景その1 大震災後の「安全」をめぐる混乱

- 安全派と危険派に二分された状態（特に放射性物質、そういえばダイオキシン類のときもそうだった・・・）
- 津波被災地域（ゼロリスクを目指しているように見える）と、他の地域（ほぼ現状維持）とのギャップ

専門家と一般市民ともに持っていた、「安全」が客観的 & 科学的に定義できる、という幻想が崩壊

⇒「安全」はリスク評価/管理なしには定義もできず、管理もできないし、リスクコミュニケーションも不可能であるという共通認識を浸透させる

背景その2 エネルギー制約社会

脱原子力 → 新規エネルギー
代替エネルギー

採取、輸送、使用、廃棄、といった様々な
場面で新規なリスクに直面する可能性大

- ・「環境法のゆらぎ」(及川氏)
- ・新規リスクを含めた複雑なトレードオフ

要するに、複雑な社会になる。

そのなかで合理的で透明な意思決定をするには？

背景その3 新規&新興リスク

- すべてをどう見渡して、優先順位を立てるか
 - 早期警戒システム
 - National Risk Assessment
 - Regional Risk Assessment
- 火山噴火(“巨大地震で噴火誘発の可能性”NHK - 2012年3月21日)
- パンデミック(新型インフルエンザ特措法案)

リスク研究者が貢献すべきこと

How safe is safe enough?

- 大震災後の安全をめぐる混乱解決への貢献
- エネルギー制約社会におけるトレードオフへの貢献
- 次の新規 & 新興リスクに備えるという貢献

Risk tradeoffs

New and emerging risks

→①リスクガバナンスの失敗学に基づく、
②社会全体のリスクガバナンスの見直し

以前からずっと存在している問題で、大震災で再び露わになったもの！放っておくと再び繰り返されること必至。

科学と政策をつなぐための評価インフラ

- リスク評価（とそれに基づくリスク管理）
- テクノロジーアセスメント（TA）
- （規制）影響評価（（R）IA）

これらを補完する形で、

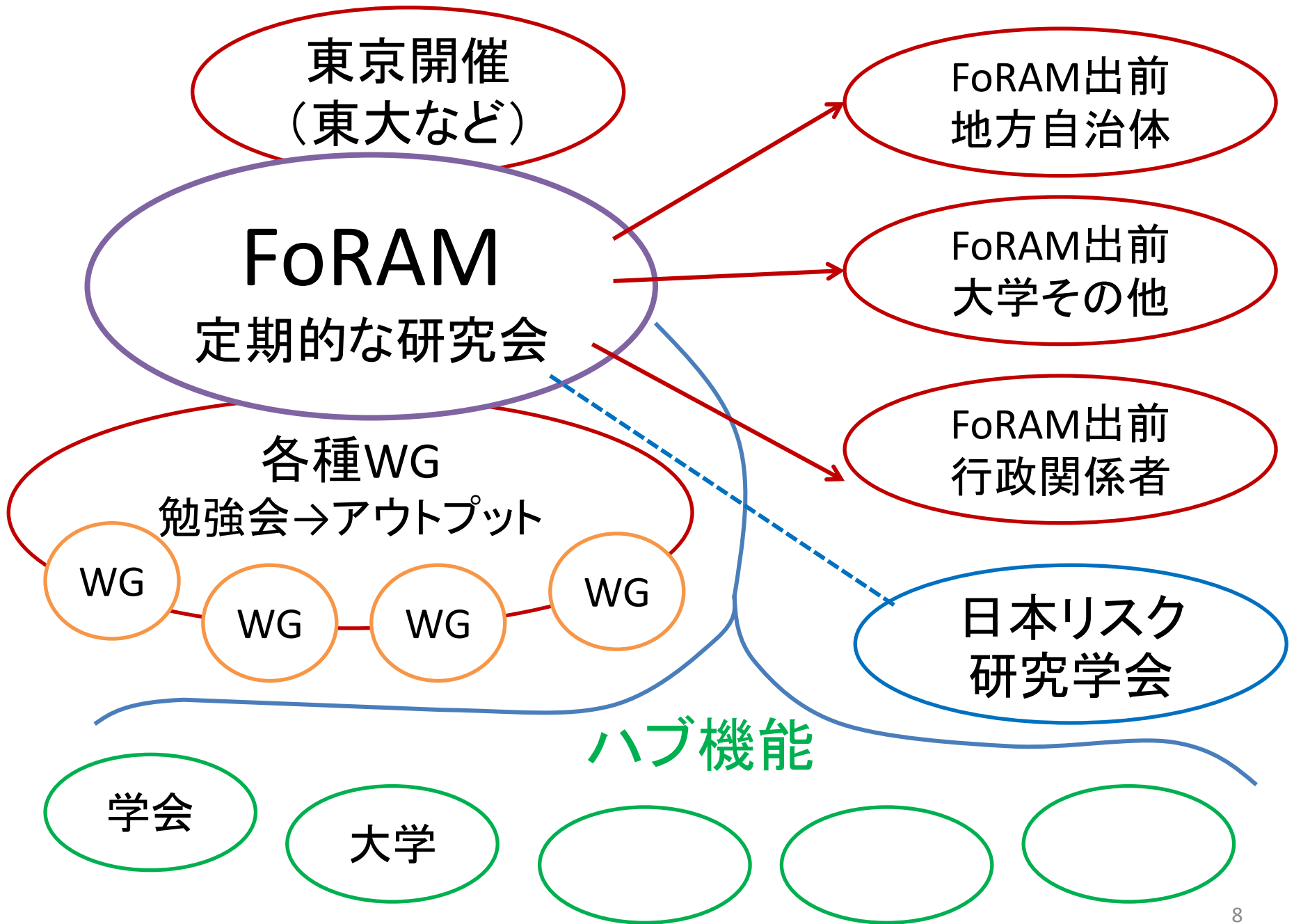
- 順応的評価 & 管理の仕組み（リスクガバナンス）
- 「レギュラトリーな科学」という考え方

本体は外部講師、WGで勉強

- 基準値の根拠WG(発足済み)
- 規制科学WG(発足済み)
- 評価枠組みWG(日本版Silver Book作成)
- 放射性物質WG
- 意思決定WG(2012年4月発足)
- モデル利用の作法WG
- 新規&新興リスクWG
- NaTechリスクWG
- 安全作法WG
- ...

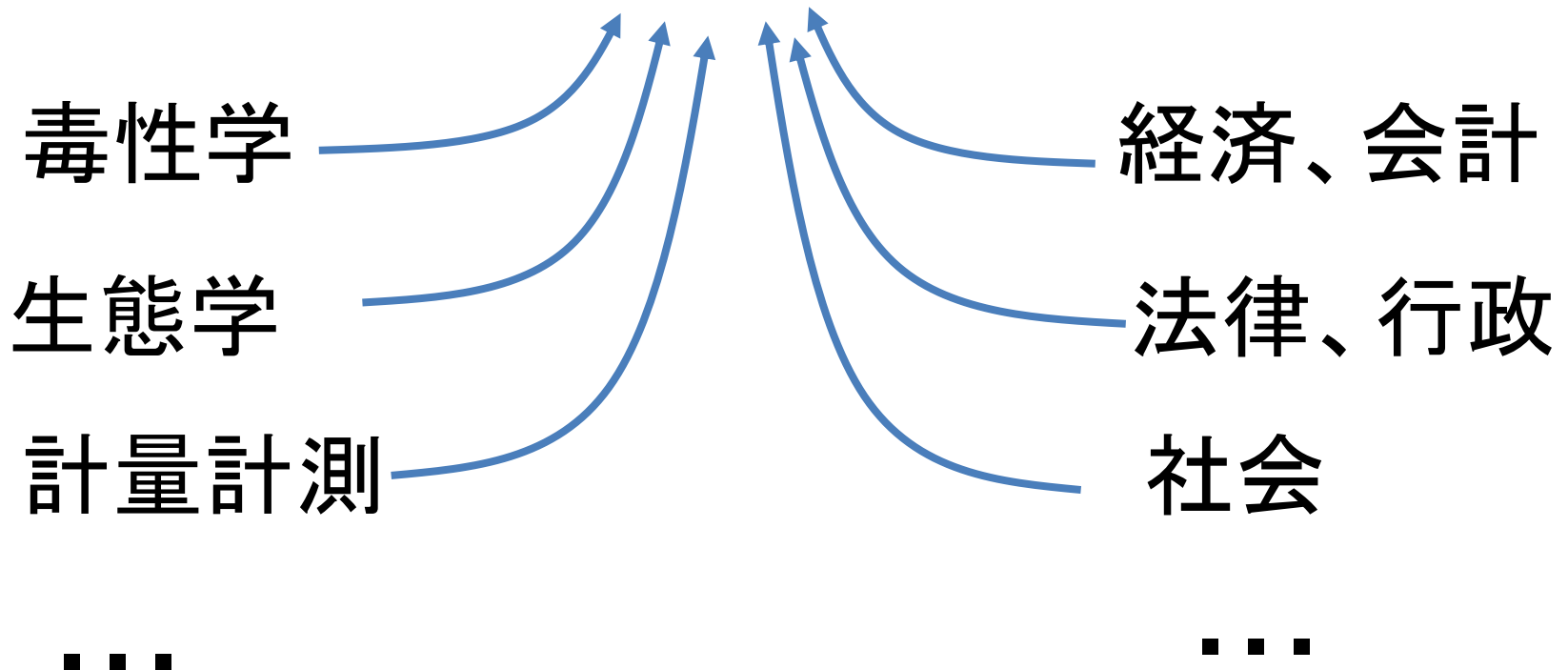
一部適当です。

※思いついたら気軽に立ち上げ・テキストを決めて勉強会をやる・アウトプットを設定する・もういいかと思ったら廃止。



学問分野の連携

リスク評価のための・・・
(レギュラトリーな科学)



アウトプットを社会へ

- 講座パッケージの作成
- テキストの作成
- Webでの資料作成（「基準値の根拠を探る」）

リスク人材の育成

- 既存の人材育成プログラム
- 東大や阪大のプロジェクトにインプット
- FoRAMで、院生を鍛える？

リスク評価の社会実装へ

1. 事業者へ 日化協 ILSI Japan

製薬協 ホンダ

2. 地方自治体へ 東京都

3. 行政府へ NITE

食品安全委員会

リスク評価の3つの顔

- 安全科学としてのリスク評価
- レギュラトリーな科学としてのリスク評価
- 俯瞰科学としてのリスク評価

安全科学としてのリスク評価

- 安全とは何かをきちんと考えよう。
- 安全とはリスクの懸念がない(とみなす)状態
- 安全を確保するにはリスク評価が不可欠、というコンセンサスを作る。
- 安全派と危険派といういつもの対立に、共通の土俵を提供する。
- 分野を超えた比較を可能にする。

レギュラトリーな科学としてのリスク評価

- 科学と政策の間のギャップを埋める。
- 不毛な「科学論争」を回避する。
- 常に最新情報によって更新すべき「約束事」として認識する。
- 「レギュラトリーな科学」はリスク分野に限らない広い概念（標準化には付き物）

俯瞰科学としてのリスク評価

- 発生源から規制まで見通せる人材の必要性
- 既存の学問分野を乗り越えなくてはならない。
- 人材育成の方法は？